

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 所長

平成 2 2 年度病害虫発生予報第 1 1 号について
平成 2 2 年度病害虫発生予報第 1 1 号を発表したので送付します。

平成 2 2 年度病害虫発生予報第 1 1 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	1 いもち病（苗いもち）	-	2
	2 スクミリングガイ	やや少	2
施設野菜全般	1 降灰に関する留意点	-	2
	2 病害全般	-	2
	3 タバココナジラミ類	-	2
冬春きゅうり	1 うどんこ病	並	3
	2 べと病	やや少	3
	3 灰色かび病	やや少	3
	4 褐斑病	やや少	4
	5 ミナミキイロアザミウマ	やや多	4
	6 病害虫全般	-	4
冬春ピーマン	1 うどんこ病	やや多	4
	2 斑点病	やや多	5
	3 黒枯病	前年と同程度	5
	4 アザミウマ類	やや多	5
冬春トマト	1 葉かび病	並	5
	2 灰色かび病	やや多	6
	3 タバココナジラミ類	並	6
	4 トマト黄化葉巻病（TYLCV）	前年と同程度	6
冬春いちご	1 うどんこ病	やや多	6
	2 灰色かび病	並	6
	3 ハダニ類	やや多	7
	4 アブラムシ類	やや多	7
	5 オンシツコナジラミ	-	7
カンキツ	1 そうか病	-	7
	2 かいよう病	-	7
	3 ミカンハダニ	並	8
茶	1 カンザワハダニ	やや多	8

作物の生育状況（2月中旬）

冬春きゅうりの促成栽培は収穫期、半促成栽培は定植期、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごは収穫期であった。

向こう1か月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、気温は高い確率50%、降水量、日照時間はともに平年並の確率40%と予想されている。（1か月予報 鹿児島地方気象台 2月18日発表）

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1. いもち病（苗いもち）

[防除上の注意]

- (1) 育苗時に発生がなくても本田で早期に発生するおそれがあるので、移植時の箱施薬を徹底する。

2. スクミリンゴガイ（やや少）

[予報の根拠]

- (1) 2月上旬の未耕起水田（宮崎市、新富町）での m^2 当たり総貝数2.4頭（平成6.8頭）は平成より少、生貝率27.3%（平成52.9%）は平成よりやや少である。
- (2) 用水路での m^2 当り総貝数60.6頭（平成35.9頭）は平成よりやや多、生貝率20.8%（平成63.0%）は平成より少である。

[防除上の注意]

- (1) 水田に生息する貝は、耕耘により破碎し防除する。この場合、土壌は硬いほど、耕耘ピッチは小さいほど、貝は大きいほど殺貝効果が高い。耕耘する深さによる殺貝効果はあまり違いがなく、貝が主に越冬生息している土壌表層部を細かく耕耘することで殺貝効果が高まる。
- (2) 用排水路からの侵入を防ぐため水の出入り口にネットを設置する。
- (3) 田植後2～3週間はできるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。
- (4) 貝の生息量が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と本田施用を実施する。

施設野菜全般

1 降灰に関する留意点

- (1) 光線不足により、生育が軟弱徒長となるため適切な肥培管理に努める。
- (2) 換気が十分に行えないことから、施設内が高温多湿となり、病害虫の発生が助長される恐れがあるので注意が必要である。

2 病害全般

1か月予報によると、天気は数日の周期で変わり、気温は高い確率50%、降水量、日照時間はともに平成並の確率40%と予想されていることから、各種病害の発生に好適な条件となるため、気候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

また、今後は夜温も高めに推移することから、加温機が稼働しない日は施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要である。

きゅうり：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

3 タバココナジラミ類（タバココナジラミ、イタライQ、シハ-リ-コナジラミ）

[予報の根拠]

- (1) 冬春きゅうりでの発生面積率21.1%（平成36.5%）、100葉当たり虫数1.2頭（平成8.0頭）はいずれも平成よりやや少である。
- (2) 冬春ピーマンでは発生を認めていない。（発生面積率：前年6.7%、前々年7.1%、100葉当たり虫数：前年0.1頭、前々年0.1頭）
- (3) 冬春トマトでの発生面積率38.5%（平成32.6%）、100葉当たり虫数1.1頭（平成2.7頭）はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミバイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は、肉眼での識別は困難である。
- (2) 多発するとすす病を併発して商品価値を著しく損ねるので初期防除を徹底する。
- (3) 低密度でも、トマトではトマト黄化葉巻病(TYLCV)を、ウリ科作物(メロンやきゅうり)では退緑黄化病(CCYV)を媒介するので、特に注意が必要である。
- (4) 施設開口部に防虫ネット(0.4mm目以下)を必ず設置するとともに、光反射マルチ等の物理的防除手段を利用する。
- (5) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- (6) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (7) 施設内外の雑草はタバココナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- (8) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を、防除体系に組み込む。

冬春きゅうり

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 促成栽培での2月中旬の発生面積率52.7% (平年49.5%)、発病葉率7.4% (平年7.1%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 耐性菌を生じやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (3) 乾燥時に発生が多くなるのでほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。
- (4) 半促成栽培でも急速に病勢が進展することがあるので、促成栽培と同様の注意が必要である。

2 べと病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 促成栽培での2月中旬の発生面積率42.1% (平年77.3%)、発病葉率6.7% (平年16.7%) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

3 灰色かび病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値 : 発生面積率10.7%、発病果率0.4%)

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- (2) 花卉等の発病に注意し、予防及び発病初期の防除を徹底する。
- (3) 耐性菌が発生しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4 褐斑病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率21.1% (平年51.0%)、発病葉率1.4% (平年10.2%) はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- (2) 窒素質肥料の多用は、発病を助長し過繁茂になって通風を妨げるが、逆に少ない場合は草勢低下を招き、好ましくないので適正な肥培管理に努める。
- (3) うどんこ病、べと病の発生後には激発することがあるので、両病害の防除を徹底する。
- (4) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

5 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率15.8% (平年8.1%) は平年よりやや多、葉当り虫数0.3頭 (平年0.5頭) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- (2) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので7日間隔で2~3回の連続した防除を行う。

6 病害虫全般 (改植時の留意点)

[防除上の注意]

- (1) ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、以下のことに留意し、次作の発生源を絶つように努める。特に前作において、キュウリ黄化えそ病が発生したほ場においては必ず実施する。

前作きゅうりの栽培を終了する前に、殺虫剤を7日間隔で3回散布する。

栽培を終えたら、ハウス内の除草を徹底するとともにきゅうりを完全に抜根する。

抜根後は、最低でも10日間は蒸し込む。(平均気温が20 のときの蛹期間が約7日であることから、蒸し込みによる施設密閉高温化が最低でも10日間は必要。)

蒸し込み期間中は、粘着板を設置し成虫を捕殺する。

後作きゅうりの定植時には、必ず粒剤を施用する。

- (2) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。

冬春ピーマン

1 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率46.7% (平年55.3%) は平年並、発病葉率11.8% (平年6.2%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないように適正な水管理に努める。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除す

る。

(3) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、2回以上の防除を実施する。

(4) 微生物農薬は予防的効果が主であり、特にダクト散布では散布ムラが生じやすいので、定期的に化学農薬も併用する。

2 斑点病 (やや多)

平成22年度病害虫発生予察注意報第3号(平成23年1月25日発表)参照

(1) 2月中旬の発生面積率46.7%(平成28.5%)は平成並、発病葉率4.7%(平成2.3%)は平成よりやや多である。

[防除上の注意]

(1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。

(2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

3 黒枯病 (前年と同程度)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬における巡回調査では発生を認めていない。

(発生面積率:前年0.0%、前々年7.1%、発病葉率:前年0.0%、前々年0.1%)

[防除上の注意]

(1) ほ場内が多湿条件にならないように、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。

(2) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

4 アザミウマ類 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬におけるミナミキイロアザミウマの発生面積率26.7%(平成30.2%)、10花当り寄生虫数0.4頭(平成1.0頭)はいずれも平成並である。

(2) ヒラズハナアザミウマの発生面積率26.7%(平成20.2%)は平成よりやや多、10花当り寄生虫数11.8頭(平成2.9頭)は平成より多である。

[防除上の注意]

(1) 今作はヒラズハナアザミウマの発生が多い状況で推移しており、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。

(2) ミナミキイロアザミウマは、10花当たりの寄生虫数が1頭から被害果が出始めるので、発見したら早めに防除する。

(3) 今後、気温の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意する。

(4) 卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で2~3回の連続した防除を行う。

(5) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。

(6) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(7) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチ被覆、青色粘着板の設置により生息密度の低下を図る。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち2ほ場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)が確認されている。(平成値:発生面積率16.4%、発病葉率2.5%)

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。

(2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の茎葉での発生面積率30.8% (平年27.3%)、発病株率4.4% (平年1.4%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- (2) 花卉の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 タバココナジラミ類 (タバココナジラミ、イタビ、Q、シバ-リーフコナジラミ) (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の発生面積率38.5% (平年32.6%)、100葉当たり虫数1.1頭 (平年2.7頭) はいずれも平年並である。

(2) 1か月予報では、気温は高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

(1) 施設野菜のタバココナジラミ類 (2 ページ) を参照のこと。

4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (前年と同程度)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち3ほ場で微発生^(注) (発病株率0.5%未満) が確認されている。

(発生面積率：前年0.0%、前々年7.7%、発病葉率：前年0.0%、前々年0.2%)

[防除上の注意]

- (1) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。
- (2) タバココナジラミ類 (媒介虫) の防除を徹底する。対策は施設野菜のタバココナジラミ類 (2 ページ) を参照のこと。

冬春いちご

1 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の葉での発生面積率46.2% (平年31.1%)、発病葉率4.3% (平年3.0%) はいずれも平年よりやや多である。

(2) 果実での発生面積率15.4% (平年11.3%)、発病果率1.4% (平年0.5%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする。
- (3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに除去しほ場内に放置しない。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

2 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち1ほ場で微発生^(注) (発病株率0.5%未満) が確認されている。

(平年値：発生面積率10.1%、発病果率：0.4%)

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので換気に努めると同時に、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空気湿度を高めないように留意する。
- (2) 病果や病葉は早めに摘除して、ほ場内に放置しない。
- (3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

3 ハダニ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率76.9% (平成53.1%)、寄生株率25.5% (平成12.4%) はいずれも平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

4 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の発生面積率38.5% (平成25.6%)、寄生株率4.9% (平成2.8%) はいずれも平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

5 オンシツコナジラミ

[防除上の注意]

- (1) 地域により薬剤感受性が低下したコナジラミ類の発生が確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除に努める。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

カンキツ

1 そうか病

[防除上の注意]

- (1) 2月中旬の巡回調査では、20ほ場のうち1ほ場で微発生^(注) (発病葉率0.5%未満) が確認されている。(平成値 : 発生面積率2.2%、発病葉率0.2%)
- (2) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (3) 春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行う。

2 かいよう病

[防除上の注意]

- (1) 2月中旬の越冬葉調査での発生面積率10.0% (平成21.0%)、発病葉率0.4% (平成2.6%) はいずれも平成並である。
- (2) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (3) 防除は予防散布が原則である。

3 ミカンハダニ (並)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬の発生面積率45.0% (平年44.3%)、寄生葉率8.9% (平年10.3%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 越冬密度の高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかつたほ場では、春季 (3月上～中旬) にマシン油乳剤による防除を行う。

茶

1 カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

(1) 2月中旬のすそ部調査での発生面積率84.6% (平年61.5%) は平年よりやや多、寄生葉率5.2% (平年8.3%) は平年並である。

(2) 向こう1か月の気温は、高い確率50%と予想されている。

[防除上の注意]

(1) 防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期 (2月下～3月中旬) で、すそ部の葉裏に多く生息しているので、十分な薬液が到達するように丁寧に散布する。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ
<http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
- 3 発生量（程度）の区分
多 い （高 い） やや多いの外側 10%の度数の入る幅
やや多い （やや高い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として 40%の度数の入る幅
やや少ない （やや低い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
少ない （低 い） やや少ないの外側 10%の度数の入る幅
(平年値は過去 10 年間の平均)
- 4 予察情報の種類
病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。
(1) 予報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
(2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
(3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
(4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499
E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp